Japanese association of educational psychology

PE 20

中学生にとっての部活動の意義

ー部活動環境と欲求満足度の因果構造からー

角谷詩織　　無藤隆
（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科）（お茶の水女子大学生活科学部）

1.問題と目的

中学校への移行は大きなイベントである。本研究では、中学生にとっての部活動の意義を検討する。環境が発達課題に関わる欲求を満たしているかが適応に重要であるという「発達段階－環境フィット理論」(Eccles & Midgley, 1990)に基づき、クラスとの比較も行いながら環境要因と個人的要因の因果構造モデルを構築して検討する。その際環境要因として中学生が認識した環境である部活の主観的環境(Rosesr & Eccles, 1997)をとりあげる。

そして、環境要因や個人的要因がどのような構造をなして中学生の適応感に関わっているのかを共分散構造分析によってより明らかにする。

2.仮説

図1に示す因果モデル（モデルA）を仮説として想定する。モデルAは、主に以下の3点を示している。

1.（c.class, d.class, e.class, c.club, d.club-e.club）

部活においても欲求が満たされることによって充実感や学校生活への満足度が高まるだろう。

2.(d.class-e.club)

クラスでの欲求満足度が低い中学生は、部活動へのコミットメントを高めることによって学校生活への満足度も高まるだろう。

3.（a.b）

中学生が認識した顧問教師の指導性が中学生の認識した部活の集団凝集性を介して部活での欲求満足度の規定要因となるだろう。

3.方法

質問紙調査を行った。

対象：公立中学校の1，2年生1003名

期間：第1回調査；1998年5月25日～6月7日
　　第2回調査；1998年10月19日～11月14日

4.結果

中学生全体における10月の分析結果を図2に示す。モデルの分析におけるGFIの値は0.86、AGFIの値は0.82であり0.90にわずかに満たないが、これは観測変 数の多さによるものと思われる(豊田,1990)。従 って、モデルとデータの適合度は高く、構成されたモデルは標本共分散行列を説明していると判断される。

なお、図2には、構成概念間の標準化された因果係数のみを記した。

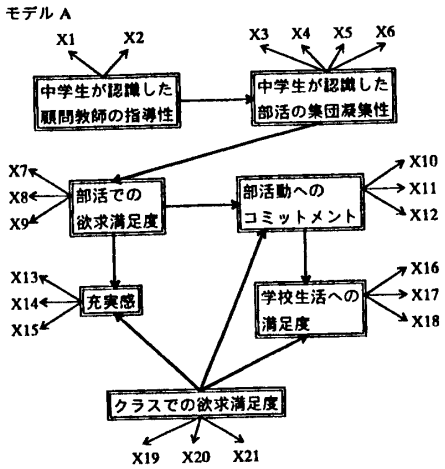

図1

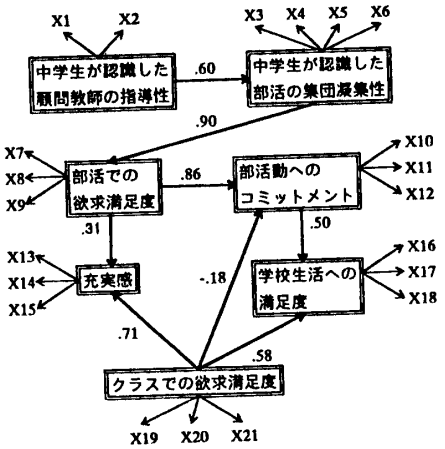

図2

5.考察

クラスだけでなく部活での欲求満足を高めることによって中学生の充実感や学校生活への満度が高まることが推測される。さらに、クラスで欲求満足度が低い中学生でも部活動へのコミットメントを高めることによって学校生活への満度が高められることも示唆された。このことは、学生活における部活の重要性を裏付けるものであと考えられる。

さらに、部活での欲求満足度を高めるためには、部活における集団凝集性が高められる必要があり、そのことに対して部活顧問の指導性が重要な役割を担っていることが推測される。

NII-Electronic Library Service